朝日のなかで

群　青

朝日の中で

手の中にかくれそうな
白いカップを唇によせるヤマダミジョン
湯気が鼻のあたり両目を隠す
音をたてず紅茶は喉を落ちていく

古い商館の一室の暗がり
唾と汗と血の匂い
もつれあう家族を見ている
時が経ち離れたところにいて
見続けている
男三人と女六人が何時間もぶつかりあっている

空を切る父親の木刀
逃げてまた押し返す娘息子
体を掻きむしって叫ぶ母親
妹弟姉兄もヤマダミジョンも涙をながしている
くりかえしくりかえし
立ちむかう
やめない

時を過ぎた朝日のなか
静かに
ヤマダミジョンは関わる
父に詰め寄るヤマダミジョン
なんでなん
しようがない
いいじゃない
つぶれず力をつけることよ

ぼくにある力とはなにか

ヤマダミジョンが韓国に向かって飛んでいく
新しい友人たちに向かって
弱々しい音をたてて陽が落ちた

残光が闇になる一瞬の東シナ海
チョゴリの金と緑がきらめいた
ぐんぐん高みに引き上げられていく

身動きができなかった
ヤマダミジョンと一緒に飛べなかった
岬の風が笑う
見えない尾行に怯えているぼく

朝日がのぼる
墓だらけの列島を
掘り返す
これしかない
なんといわれようと掘り返す
もっと奥だ
兵器の残骸
隠し兵器の
もっと奥へ
あるんだ
必ず
心臓
肺臓
子宮

睾丸
筋肉と筋を
見つけ出すんだ

掘る
地図なんか要らない
海峡を越えるぞ
ヤマダミジョンにたどり着くぞ
ぼくもヤマダミジョンも孫を連れていても

そこはここだ
ここはそこだ
ここ以外にそこはない

吹雪の大橋を渡る
立ち入り禁止地区
いずれ死ぬのですが
さしあたり
一番の心配は
子供と若いおんなたちです
新しいいのちは
被曝したこの土地に

どうでしょう

取り残された老人たち
背の高い枯草に囲まれ
一団の猪が走っていく
時限介護と日に一合の米
八十過ぎた佐藤勇がいう
やってくるまでは
だれもが自力です
必ずやってきますから

流れの中にいることはわかります
しかし
なにがやって来るかわからない

四十年前あっけなく死んだ吉川道夫がやって来る
口を大きく開けてすっかり歯をむきだしにした
笑い顔
唾と一緒にあふれ出てくる言葉
元気な体の匂い

焼け続ける町や野から

やって来るものをずっと待っていた
瓦礫は寝床
祈らず
生きているか死んでいるかわからない
だが生身の姿が
何人も現れ出るに違いないと
おれたちは待っていたんだ

栄養を横取りする放射能の虫のようなものが
体の中に増えて行った
ころんころんとあたり構わず気を失い倒れ
膨れた腹をむきだしにした

だがきっとやらねばならない作業を一緒にやる人が
群れをなして来るんだ
ぽろぽろに焼けたコンクリートを剥がそう
墓の蓋を開けよう
埋められたひとたちを呼びだそう
一緒に飯を食おう

銃器と役人におれたちは追い払われた
家族をあてがわれて
やって来る人への期待は内密になった

おれは決心をした
おれがやってくる人たちを連れてくると
吉川道夫は朝日がさす川べりでころんと倒れそのまま死んだ
だだっ広い慰霊園のそばの川

時折吹いてくる涼風
日照りが続く
硬い土
水がたくさんいる
立っている花たちは
生きのびている

墓石を押し上げるぞ
目を輝かして入る黴だらけの穴
ふくれあがる熱気
きっと決着をつけるぞ
誰もがいう
キャップランプを灯ける
百年以上も過ぎた
地下から出る
戦争が絶えない

そここの坑道で
深々とあらゆるところで
悲しみを育ててきた

あとからやってくる時間や立ち塞がる時間
今渦巻く時間
ぶつかり合う
きしみ重なるかと思うと引いていく
海が河の流れを押し返す
曇り空の上で諍う星と闇

被曝の峠に立つ

生き残ろうとしている血沼の資本主義
歌い手は歌い続けるために大きな口をあけている
働き場や町や港を
巨大墳墓が重戦車のキャタピラをつけて取り囲んでいる

薄藍色の仕事着の
橙色の作業帽の
労働者たちはどこに行った
春キャベツの葉を剥いでいた農夫たちはどこに行った
黒い腕カバーをして片目で時計の腹を覗く職人は

どこに行った
レジスターの音もしない
満員バスも走らない
桃色のイヤホーンをつけて笑い合う学生たちもいない
手押し車にすがる老人たちもいない
初めて土を踏みしめる幼い足も見ることが出来ない
みんなどこにいったんだ

峠を降りて行こう
分かっている
仲間と合流だ
どこにでも隠れる場所はある
これからはずっと一緒だ

国のない光景が見えている
子供の記憶に入っていく
あたらしいひとたちが
掘りだす
うたいたい詩などを

ある小部屋

午前五時の母を呼ぶかすれ声の演歌放送
布団の四隅を合わせてたたむ
隠れようもない台の上の便器をまたぐ
男がやってくる前に出入り口に向かって正座する
左奥から番号を叫ぶ声が近づいてくる
男が正面に立ったら２千番台の番号を大声でいう
どこで対面したのか覚えないが男の背格好から顔つきまで分かる
右の部屋が最後で声は止み男はどこかに消える
気配を残さない
灰青色の菜っ葉服を着けた数人の男がワゴンを引いてくる
溶けそうな麦飯と味噌汁とたくあん
アルミの器三つの朝めし
小窓から差し入れられる
手際いい
なにもしゃべらない男たち
死刑が決まった男たち

すべてのことが突然止められた
そのまま宙にぶら下がった
時間に流されるまま
意識だけがスタンドの明かりのようにともっている

寝転がり禁止を守る
南に向いた小窓の向こうを眺めている
棟は中庭を囲んで四つ
遠くは見えない
灰色続きの冬の空
円い血色の鳩の目

伝えたいことなど
止まったままのありさまで日が過ぎる

運動　風呂　洗濯　掃除
欠かさない
差し入れの注文をしない
読みたい本は開かない

窓の格子に括り付けられた縄が首を巻き体は宙づりに
ぶら下っている光景が見える

あらたな小部屋

トイレと浴室と洗面台は部屋の中央

東側のくぼみにベッド
西側にエントランスとわずかな空間
左の尿管に石が挟まって落ちない
一時間おきに入ってくる女の看護師が時を告げる
縦長の細いガラス窓から夜明けがやってくる
左腕に一日中液が注ぎ込まれる
入り具合が悪くなると低いブザーの音
急いで入って来る看護師はディックディック
大丈夫大丈夫と独り言を言う
食事を運び込む女たちは五十歳台に見えた
当たり前の会話が二言三言できた
それだけの言葉で次の日が来た
体の向きを変えたり起き上がるには力がなかった
痛みはない
本は開かない
イヤホンもつけない
ぼくは
緑色のうっすらと温い水の中で揺れていた
ジュンサイのようにも
壊れかけたみずやの枠組みのようにも
水に溶けていく魚の心臓のようにも思えた
暗がりで
脳がひとりカードゲームをやっていた

キリング　ミー　ソフトリーと歌がくりかえされた

釣舟

海霧が立ち込め
手漕ぎの釣舟の影が見える
身じろぎもせず
背をくぐめ
波間を身つめる男
スコッチと紙巻煙草
自殺した
私を突っ張らせて生きた
男

おれの周りを歩いてみろ
なんかまとわりついているか
ハリー船長がいう

ぐるぐるに巻きつかれて逃れられないヘミングウェイ
ガタガタの心身に突っ込まれた薬品の管の束

銃をくれ

高野の奥の院に座り続けている瞑想の空海
魚を追い
壊れた私を追い続けている小舟のヘミングウエイ

ドグマまぐろ
カラスがない
この頃はやりの
わざうた

痛み

痛いんだ
どこが痛いのかわからなくなった
体じゃない
脳が
いや
脳で
痛んでいる
痛みは精神だ
いや

心身が溶けてぐちゃぐちゃになっている
ぬめぬめだ

怒鳴る
悲鳴を上げる
薬しかもってこれないのか
世界が企んでいるな

ウジがわきだしたぞ
痛みがウジを産み出した
ウジが叫んでいる
聞こえるぞ

だが痛い
体と精神がこんがらがっている
痛いのだ

「つまり詩人とは、千年来の天変地異に由来する、苦痛のリアリティと不可分の、あのちいさな震えであって、それは現に生きてきたし、いつまでも生き続けるでしょう」（ジャック・プルヴェル宛：「死に至る罪」の読後　ロデースからの手紙　アントナン・アルトー著作集Ⅴ　白水社）

心身のてっぺんで

痛む
資本主義の股を裂く
痛みを形而上に押し上げて
アルトーが裂き続ける

詩だ
詩が痛みをつかまえている
私有物にするな
残酷が詩だ
アルトーが資本主義を切り裂く

ことばが
ここにあるそこにある
息絶えだえだ

治療のこと

町医者は診療所という看板を
人体修理所　ピットインに書き変えた
医学書は
修繕のアルゴリズム
故障の取説ファイルを載せている

万能薬めいて
それだけだ

果てしない愛

宙に広がり
雲をもてあそび
気流を乱し
光の警告を受けてもやまない

この思い
死人を掘り返し
森や木々を焼き
涙や涎や唾や鼻水を川に流し
これほどの思いを遂げさせてくれ
と
ありとあらゆる人や車両を
極暑極寒に繰り出し
これまでのどの大戦よりも
超超過勤務
コックピットに張り付けの
労働者たち

素敵なまぼろしをリアルというんだ
生身は要らない
生身もどきこそが現実だ

地球がガラポンガラポン
純白に金の縁取りの大皿に盛られ
逃げ遅れた上官らがさあ食事だと歌っている
階級が生きのびるには　生身だ生身だ

わらべうた

背きたいのに
父たちがいない
いつからか
もぬけの殻の枠組みが
あちこちに転がっている

だだっ広い場所は
ただただっ広い
若者が立ったり歩いたりしている
やがて

群れが歩き出す
スマホが知らない一本道に向かう

まつ直ぐな髪
やせた体にカバンを斜めに掛けた中学生が群れの中に入った
誰と話すわけでもなく
穏やかにあるく

資本主義の辺にこそ死なめ
顧みはせじ
歌う町が遠くなる
緑の旗もない
ワン　リトルリトル　ツウ　リトル　スリー　リトル
ミリオン　リトル　ピープル

地球が迎えに来てくれる
誰かがいうと
みんなが頷く

いいじゃない
夢見る歌